聖地のこどもニュース

オリーブの木

No.82
2021年11月

エルサレム旧市街「スパニッシュ・スクール」を訪問（2018年スタディ・ツアー）

エルサレムで最も小さな学校の一つ、通称「スパニッシュ・スクール」*。旧市街中心部にあり、幼稚園から高校まで、貧しい家庭の子どもたちが通っています。壁に囲まれた「校庭」は、15、6人がゲームをするのもやっとの狭さ。ランチタイムには、幼稚園児が壁沿いのベンチにぎゅうぎゅうに座って家から持ってきた貧しい弁当を食べます。

笑顔がひときわ可愛いアナベラちゃんは中学生。脊椎カリエスのため普通の椅子には座れず、クラス最前列に置かれた車椅子に座ってニコニコしていました。彼女はみんなの人気者。幼稚園の時から日本の里親Rさんの支援を受けています。（P8参照）

校長先生のシスター・マルタに電話すると、「コロナになってから、この学校を心配して電話をくれたのはあなたが初めて！」と声をつまらせました。ご高齢のシスターが、不安と孤独に耐えながら、学校存続のためにどれほど頑張ってこられたか。効率最優先の社会で支援の手からこぼれ落ち、限界に苦しむ人がどれほど多いことか！

私たちのNPOが、聖地のこどもたちの希望をほんの少しでもつなぐお役に立てれば……。皆様のご支援にあらためて感謝申し上げます。

＊経営母体はスペインの「柱の聖母修道女会」

井上 弘子

認定NPO法人
聖地のこどもを支える会
事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502
Email ispalejpn@gmail.com
TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」
当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。
https://seichi-no-kodomo.org

スタディ・ツアー応募者の面接から

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

2022年春のスタディ・ツアーに参加を希望する学生たちの面接が11月6日から始まりました。募集を締め切っておらず、面接もまだ続くと思いますが、井上弘子理事長と二人で話を聞いた数人の若者たちがどのような意気込みで応募したのかを紹介するとともに、対話の中で印象に残ったことなどを述べたいと思います。

コロナ下の模索

スタディ・ツアーの実施自体がコロナの感染状況次第でどうなるかわからない、というのが11月現在の実情です。応募した皆さんの中には、20年春の企画に応募しながらコロナ禍のためにツアーが見送られ、再度の挑戦の機会を心待ちにしていた人もいます。その一人、Aさんは、21年のツアーも中止になったにもかかわらず応募の意欲を失わず、2年越しの参加実現を目指しています。

Aさんは19年の夏のプロジェクトに参加。イスラエルとパレスチナから日本にやってきた若者たちと合宿生活をしながら交流し、彼らから生の声で現地の情報を聞いたことで、メディアや本から得られる現地の情報が限られたものであるとの認識を得た、といいます。そして、その地で起きていることは自分の目で、耳で確かめないと本当にはわからないだろうと思い、応募したそうです。夏のプロジェクトで友だちになったイスラエル人、パレスチナ人とは今でも交信しており、現地で再会を果たせるかもしれないという期待もあります。

トルコで教育を受けられない子どもたちのためにボランティア活動をしようと計画していたのに、コロナのために叶わなくなったというのは、Mさん。もともとpeace keepingに関心があり、その方向へ進む上で、このスタディ・ツアーの経験が生かされると思ったとのことです。他人を思いやる心を大切にしたいというMさんは、途上国の子どもたちに平等に教育の機会を提供する機関で働きたいと言います。聖地のこどもを支える会の教育支援活動にも共感するでしょう。

語学教育の進化

このツアーは観光旅行とは違って現地の人との交流の機会もあるので、ある程度の語学力が期待され、アンケートには英語力を問う欄があります。今回の応募者の場合、だれもが日常会話程度ならできるのは普通のようで、留学を経験しているのは何人もいました。また、今回が目立って多いのかもしれませんが、高校段階で語学に力を入れている所が増えているのかもしれない、との印象を持ちました。

アラビア語が日常会話レベルに近いというR君の場合、高校が第二外国語を必修にしていて、選択肢の中にフランス語、スペイン語、ドイツ語などと並んでアラビア語があったそうです。教師がシリア人だったとのことで、言葉だけでなく中東情勢などについても話が聞けるというおまけもつきました。Mさんの場合は、高校時代に英語だけで話す授業の時間があったといいます。また、学校教育の場ではなくとも、Aさんのように訪日したパレスチナ人を案内した縁で、アラビア語の個人レッスンを受けるようになった、という例もあります。

リモートの威力

コロナ禍の副産物として、テレワークだの、ズーム会議だのといったリモート機器を使っての仕事やおしゃべり、果ては宴会までが盛んになりました。仕事や教育に関しては、直に接することでしか得られない効果が失われるなどの問題点が指摘され、パソコンやスマホでのバラバラな「集まり」ばかりで「リモート疲れ」などという言葉も聞かれました。

一方で、遠隔地だったり時差があったりで出会うことが難しかった者同士が、話し合う機会を作りやすくなったという便利な側面は、確かにあります。そもそも応募者との面接が、どこかに集まる必要もなく実施できたものです。それはともかく、学生たちの話を聞いていると、一か所に集まらなくてもすむ用事の場合はリモートですませることが多くなっていることを感じました。

もっとすごいのは、これはAさんの例ですが、先に述べたアラビア語の個人レッスンというのは、教師役のパレスチナ人がガザに戻った後、ズームで連絡を取り合ってレッスンが始まったというのです。文字を覚えることから始まった、週に一度のリモート教室は、もう1年半ほどになるそうです。

聖地スタディ・ツアーのここがすごい！ 2022年スタディ・ツアー説明会でのOB/OGの体験談から

矢加部真怜（2014年スタディ・ツアー参加者）

1.紛争の両当事者の生の声に触れられる

・イスラエル・パレスチナ両国の同世代と交流することで、彼らが紛争について日々どのように感じているかを知ることができる。

・教育関係者など、和解に取り組んでいる当事者に勇気づけられた。

・死海でイスラエル・パレスチナ双方の学生と遊んで、ツアー参加者が見聞きしたものをシェアリングする機会も。

・現地で良いガイドを雇えば歴史について理解はできるが、同世代と同じ目線で語り合うことで得られる学びはこのツアーならでは。

2.紛争（≠戦闘）というリアルを体感

・紛争と言っても、毎日大規模な戦闘が起きているわけではない。圧倒的優位に立つイスラエルが、パレスチナ側を生かさず殺さずで、占領、抑圧しているのが実態。

・国際司法裁判所の勧告的意見で違法とされた分離壁、ヘブロンの町で入植者の嫌がらせから身を守るためのネット。

・イスラエル側からすれば、「自分たちの命と生活を守るためのテロ対策」、パレスチナ側からすれば「尊厳と暮らしを守るための決死の抵抗」立場によって相反する正義があった。

3.両国交流のきっかけになる

・イスラエル、パレスチナの人々は、同じ地域に住んでいても、互いに交流が希薄。

・日本人という第三者がいてはじめて生まれる交流の機会。

・双方の橋渡しをすることで、「平和の種」を蒔くことができる。微力ながら和解の一端を担えることこそがこのツアーの意義。

現地で、紛争の現実と平和に強い関心を持っている若い世代との交流に私も元気を頂きました。来年より日系NGOのエルサレム事務所で勤務する予定ですので、一人でも多くの方に現地でお会いできるのを心待ちにしております。

やかべ まさと　東京外語大学でトルコ語専攻。2014年当法人のスタディ・ツアー参加をきっかけに、トルコに1年間留学後、外務省職員としてアンカラの日本大使館で2年間勤務。まもなく日本のNGO職員としてエルサレムに派遣され、ガザ地区の支援に携わる。

2年ぶりのスタディ・ツアーにご支援を

2022年春に再開を予定している当法人の青少年国際交流「スタディ・ツアー」。あらためて皆さまのご支援をお願いいたします。

現地の物価高騰、円安の進行など、法人の運営努力を上回る事態で、旅行費用の維持は限界です。さらに今若者の日常は深刻です。コロナ禍によるバイト先の減少や賃金カットなど、経済的な困窮でツアー参加をあきらめざるを得ない者が出ています。

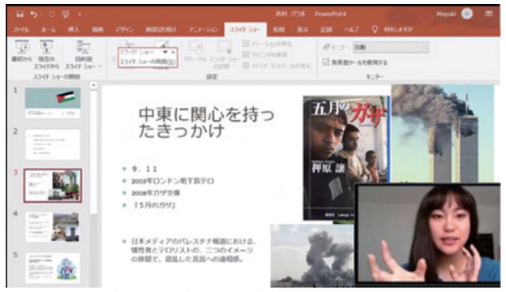
平和のためのツアー参加者に、皆様のご支援をお願いいたします。

スタディ・ツアー実施予定
2022年2月24日（木）～3月7日（月）

学生寮でオンライン講演 早稲田大学レジデンスセンター

11月4日、早稲田大学の国際学生寮「レジデンスセンター」の寮生に向けて講演を行いました。法人理事長と2名の国際交流プロジェクト参加者が、紛争と当法人の活動について、オンラインによる資料共有を交えてレクチャーしました。参加者からは「中東の厳しい現実を知って驚き、また大変参考になった」などの感想が寄せられました。同センターからは次回も講演の依頼がありました。

講演の詳細 → https://seichi-no-kodomo.org



プレゼンアプリで講演する当法人スタディ・ツアーOG

エルサレムでの暮らし

内藤 徹（当法人理事、清泉女子大学講師、JICA元職員）

今年の夏から当法人の理事になりました内藤と申します。2018年8月から1年7か月、エルサレムに住んでいました。同じJICAに勤める妻のパレスチナ事務所への転勤を機に、早期退職して、2人の子どもとともに家族4人で行きました。今回は、エルサレムでの生活について書きたいと思います。

私が住んでいたのは西エルサレムで、イスラエル側の地域です。歩いて10分もすると、パレスチナ人が住む東エルサレムとの境の道路まで行けます。特に境界だからといって、分離壁も検問所もありません。パレスチナ側の地域はイスラエルが併合しているという位置づけだからです。そして、観光名所が集まっている旧市街も、歩いて15分ぐらいで行ける便利な場所に住んでいました。ご存知の通り、旧市街は、キリスト教の聖墳墓教会、ユダヤ教の嘆きの壁、イスラム教のアルアクサ・モスクと岩のドームがあるので、3宗教にとって重要な地です。

子どもは行った当時は小学3年と中学1年でした。エルサレムに着いて早々、近くのインターナショナルスクールに通わせました。親の都合で、英語もできないのにいきなり英語オンリーの学校に通わされたのだから大変だったでしょう。最初の数か月のストレスは相当なものだったと思います。同じインターに通っている子どもたちの親は、国連や各国の政府機関あるいはメディア関係で働く人が多く、さすがエルサレムという感じでした。ちなみに、エルサレムには日本人は結構住んでいて、援助関係者（大使館、JICA、NGO）、メディア関係者に加え、研究者（ヘブライ大）、留学生、あとは現地の方と結婚してガイドなどをしている方などがいました。企業の駐在の方はエルサレムではなく、テルアビブやヘルツリヤに住んでいるというのも特徴的でした。

買い物は、近所のスーパーか、歩いて20分ぐらいのマハネー・イェフダ市場に行っていました。それはエルサレムで一番大きい市場です。ただ、ユダヤ人には、豚肉やうろこの付いていない海産物は食べてはならないという、食事に関する厳格なルール（コシェルと呼ばれる）があるので、そういうものは普通の店では手に入りません。そこで、豚肉やベーコンは、ロシア人がやっている店で、エビやイカなどは、アジア系のお店で冷凍ものを買っていました。アジア食材店は徒歩圏内に3軒ほどあり、日本の調味料や、豆腐、海苔、中華麺、そば、うどんなども売っていました。市場にない大根や白菜も、季節になるとそういう店に行けば手に入りました。西エルサレムは物価が高く、レストランは日本の倍ぐらい。ランチであまりおいしくないパスタが2千円ぐらいしたりして、必然的に家族では外食をしなくなりました。

我が家の近所にいる多くはヘブライ語を話すユダヤ人でした。黒い帽子をかぶり、黒い正装をした超正統派と呼ばれる人も周りに大勢いました。金曜の日没から土曜の日没までは、イスラエル側は安息日です。日本の正月みたいに店が一斉に閉まり、飲み水を買うのにも困ったぐらいです。路面電車も止まります。でも、東エルサレムに行けば、土曜日は普通に店が開いていて買い物ができました。そこはアラビア語の世界で、物価も安いので、時々歩いて買い物に行きました。ちなみに、エルサレムは英語が結構通じるので、現地の言葉はほとんど覚えませんでした。

日本から見れば、エルサレムの治安は悪いように思われますが、基本的には問題はありませんでした。行ったばかりの頃は、救急車のサイレンの音が外で鳴るたびにびくびくしていましたが、特段の事件でもなかったようです。また時々バーンと爆発のような音がしてびっくりすることもありましたが、あとで聞くと「現地で時々やっている花火だから心配するな」ということでした。慣れてくると、中学生のムスコが近所に出かけていて、夜暗くなってから一人で帰ってきたとしても、特に心配がないくらいでした。

写真左　超正統派ユダヤ人
写真右　マハネー・イェフダ市場

当法人の活動が教科書に載りました

当法人の活動が高校の教科書に掲載されました。山川出版社発行の歴史総合教科書『わたしたちの歴史』の1ページ。「多様な人々の共存」のタイトルで、当法人の活動が、イスラエル・パレスチナ紛争のあらましと共に紹介されています。

日本の支援者の皆さま、ありがとう！

おかげさまで、この1年間（2020～2021年度）、延べ147名の生徒が学校に通うことができました。

所在地・学校名	支援できた生徒数
●エルサレム	
聖ディミアナ コプト学院	14
聖ヨゼフ学院	4
テラ・サンクタ学院	11
聖ディミトリオス スクール	3
聖ジョージ学院	3
聖タルクマンハス学院	12
プリンセス・バスマ学院	13
シュミット スクール	4
ハデタ学校	2
イブレア修道会付属学校	2
カトリック大主教区付属学校	15
スパニッシュ・スクール	1
アメリカン・インターナショナル スクール	1
●ラマッラ	
福音派ルーテル学院	1
●ベツレヘム	
エフェタ聴覚障害児スクール	5
ダル・アル・カリーマ学院	10
シーラ学園	10
福音派学院（アカデミー）	1
●タイベ	
ギリシア正教学院	15
●ベイト・サフール	
ギリシア正教学院	2
●ベイト・ジャラ	
聖アフラム学院	15
タリタ・クミ学院	1
●その他	
聖なる幼子プログラム	2
合　計	147

一層の支援をお願いいたします！

9・11から20年「対テロ戦争」の失敗が示すもの

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

2001年9月11日、ニューヨークの貿易センタービルなどにハイジャック旅客機が突っ込んだ米同時多発テロについては、このコラムでも何度か述べてきました。現在の大学生の大半は、ビルが崩壊するあの衝撃的な映像が流れたニュースを見ていないのだと思うと、過ぎ去った年月の長さを実感します。テロの首謀者をかくまったとして、当時の米ブッシュ政権はアフガニスタンのタリバン政権打倒の戦争を始めました。しかし、この8月末にアフガニスタン駐留米軍は撤退し、タリバンの返り咲きを許してしまいました。20年もかけた「対テロ戦争」は失敗に終わったのです。

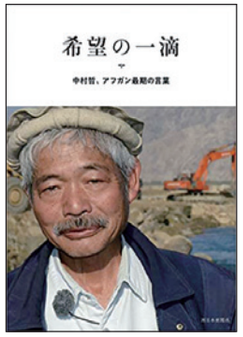
何との戦いだったのか

同時多発テロからちょうど20年目の今年9月11日の朝日新聞に、アフガニスタン駐留の部隊に派遣された米兵を取材した記事が載りました。海兵隊員や国務省職員としてアフガニスタンだけでなくイラクにも派遣されたことがあるという元米兵は、アフガニスタン南部の山奥に出向いたとき、村人からこう言われたと記事にあります。

「米軍が進出すると、イスラム主義勢力のタリバンが『外国人による占領から人々を救うために』として駆けつけ、戦闘が起きる」と。つまり、テロリストとして米軍が戦っているはずのタリバンが姿を見せるのは「米軍がヘリコプターでやって来た時だけだ」と言われた、というのです。

この話で連想するのは、アフガニスタンで長年、医療活動や農業のための水利事業を続けていた故中村哲さんのことです。中村さんは2001年10月13日、日本の安倍政権が自衛隊の海外派遣を可能にするために提出した「テロ対策特別措置法案」を審議する国会の衆議院テロ対策特別委員会に出席しました。参考人の1人として意見を述べるためです。

中村さんは「自衛隊が派遣されると軍事的存在にしか映らず、これまで築いた信頼関係が崩れる」と述べました。現地の対日感情は非常にいいのに、「米軍を支援する『日本の軍隊』は、NGO活動に悪影響を及ぼす」として、自衛隊派遣は「有害無益」と断言したのです。



中村哲さんの著書の一つ

中村さんによると、活動拠点のアフガニスタン東部ジャララバードにNGO活動などのために大勢いた欧米の人たちは逃げ出し、外国人は中村さんだけになったと言っていました。米国を中心とする多国籍軍がやって来てから、その軍事行動に対する報復攻撃が激しくなり、治安が悪化したからだというのです。アフガニスタン人は、多くの自国民の命を奪ったとして米国を憎んでおり、その米国に日本が加担すると見られれば、中村さんにとっても危険な事態になるというわけです。当時、安倍首相は、海外で活動するボランティアが襲われた場合、自衛隊は彼らを救うことはできないと発言し、特措法で自衛隊を派遣できれば守れるようになると言っていましたが、中村さんは、まったく逆でかえって危険だと言ったのです。

国会での中村さんの発言に対し、自民党議員から野次が飛んだといいます。自衛隊を派遣できるようにしようという法案に対し「有害無益」とまで言われて頭にきたのでしょうが、武力に頼らない貢献をして現地で尊敬されるようになった中村さんの実績を見てもなお、罵声を浴びせるのでしょうか。

恨みは力で抑えきれず

筆者の知人に、地方紙を退社した後、農業を始めた人がいます。彼は、例えばヨルダン川西岸のユダヤ人入植地を守るために、あるいはイスラエルとの境界の分離壁建設のために、パレスチナ人が農地を奪われるという話に、「自分で田畑を耕すと、土地を奪われた人たちのつらさ、情けなさを余計に感じるようになりました」と便りに書いてきます。

それはともかく、彼は日本の食糧自給率の低さを心配して「お米作りも自分たちを守る一策と、なんとか励んでいます」というのです。そして「大きく考えると、コロナワクチン買い取り（の遅れ）に見られたように、もしも食糧危機になったら同様のことになりそうと思っています」とも懸念しています。つまり、世界中が食糧危機に見舞われたとき、日本のことを思って食糧援助をしてくれる国がどれだけあるだろうか、という心配です。

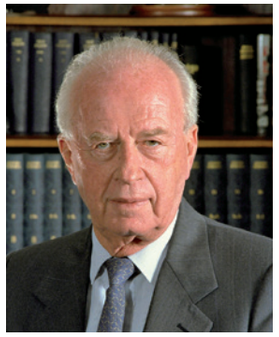
ふと、中村さんの灌漑水利事業のおかげで干上がった耕地に緑がよみがえったアフガニスタンの農民たちなら、「中村さんの母国のために何かしてあげられないか」と考えてくれるかもしれない、と考えました。安全保障とは、圧倒的な武力で敵の攻撃を防ぐ、というだけのものではないはずです。

20年前、同時多発テロを受けた米国は、テロの首謀者とされるイスラム過激組織アルカイダの指導者をかくまったとして、タリバンの根拠地アフガニスタンを攻撃したのでした。力のある者は、やられたらやり返すことができます。米国民は当然のこととして、「悪者」に対する報復攻撃に拍手を送ったことでしょう。強力な爆弾などが見舞われる地に、普通の人々もいることなど考えることもできずに。

一方、どんなに理不尽と思える仕打ちを受けようと、相手の圧倒的な武力の前に黙り込むしかない人々が、世界中にいます。その怨念が積もり重なると、正攻法など無縁のテロの温床になるのです。テロが悪だとわかっていようと、強者が打ちのめされると快哉を叫ぶ人々がいます。力による抑え込みが続く限り、怨念の積み重なりは消えません。大人が語る怒りを、恨みを、子の世代が実際に経験し、次の世代に語り続ける限り。あるいは、その人々が根絶やしにされない限り。

悪循環絶つ覚悟の和平

話はパレスチナ問題にもつながります。パレスチナ国家を樹立してイスラエルとの二国家共存を目指すとした1993年のイスラエル・パレスチナ自治合意（オスロ合意）に道を開いたのは、故ラビン首相でした。ラビン氏は、イスラエルという国家がユダヤ人の生存権を保証するためとはいえ、アラブ人が住んでいるパレスチナの地に自分たちが入って来てつくったものであり、それが紛争のもとになっていることを認識している自分たちの世代が紛争を解決しなければならない、と覚悟したのです。


ラビン首相

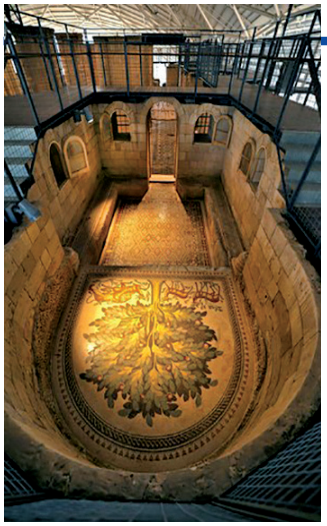
首相になる前は参謀総長など軍の責任者として、イスラエルに対する武装闘争を続けていたパレスチナ解放機構（PLO）と戦い、占領地の反イスラエル民衆蜂起（インティファーダ）で投石するパレスチナ少年たちの骨をたたき折らせるなどしていたラビン氏でした。ですから平和主義者というわけでもないのでしょうが、力で抑えつけても暴力と憎しみの連鎖は断ち切れないという現実的な判断から、PLOとの和解に踏み切ったのです。

しかし、和平は簡単に成るものではなく、パレスチナ側のイスラム教過激派によるテロが続くとイスラエル国内の和平反対の空気が強まり、ユダヤ教過激派によりラビン首相は暗殺されました。双方の過激派の声に耳を傾ける限り、和平の空気は簡単につぶされます。

アフガン駐留経験の元米兵の話に戻ると、「我々はテロとの戦いをしているつもりだった。でも実際には内戦に巻き込まれ、むしろ状況を悪化させていた」という実感を、そして、米国が迷惑がられていたとの思いを語っています。

テロリストを一掃し、世界を危険から守ろうというのがなぜ迷惑がられるのかと米国民は怒り、不満に思うでしょうが、安全は武力だけでは保障できないようだということは、アフガニスタンでの20年にわたる戦争の失敗が改めて教えてくれたのではないでしょうか。

確かに、安全保障が他者の善意に頼れるほど単純なものではないことは、世界のあちこちで起きる争いを見れば明らかです。それでも、戦争ができる力を持つことで胸を張ろうとするより、武力に訴えずに争いをなくす道を追求し続けることで国際社会に存在感を示せたら、その方が誇らしいことだと思います。



メディアから

◀ 世界遺産ヒシャム宮殿大浴場の床のモザイク（8世紀、ウマイヤ王朝時代）。最近日本のODA援助で見事に修復された。（エリコ）

「コロナ禍」で2021～2022年新学年が始まった！（イスラエル・小学1年のクラス）（現地の新聞、Haaretsより）
男の子の小さな「帽子」は、「キッパ」と呼ばれ、敬虔なユダヤ教徒のしるし。白板の文字はヘブライ語で《シャローム》（平和）。 ▶

▲ イスラエル治安部隊に捕まえられたパレスチナ人の男の子。

スパニッシュ・スクールにて

▲ 手前の女の子が、脊椎カリエスのアナベラちゃん。（P1参照）

▲ 高校生のクラス。

ラマラの街で出会った人びと

▲ パレスチナの伝統的なダンス《ダブケ》の衣装を着た人々。

▲ オリーブの収穫に笑顔がこぼれる。

▲ 元気いっぱいの兄弟。

▲ パパとママにぶら下がってご満悦！

写真撮影　内藤徹、ダリーヌ・ラマ、ヤクーブ・ガザウィ、井上弘子